

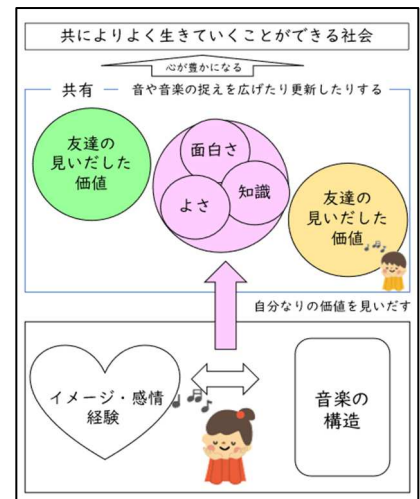
音 楽 科

音楽科部 稲森 稚明 武居 伶音 依田 理紗
研究協力者 吉田 秀文

I 音楽科における真正な学びについて

感性を働かせて、音や音楽から感じ取った曲想と聴き取った音楽の構造とを結び付け、自分のイメージや感情・経験と関連付けながら、音楽の価値を広げたり更新したりする学び

本校では、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指している。「共によりよい生活を創造する子ども」を育成するためには、音楽科を学ぶ本質的な意義である、「音や音楽の自分にとっての価値を、広げたり更新したりすること」が欠かせない。音や音楽を聴いて、美しさに感動したり楽しさに心が動いたり、音や音楽によって自分の感情が揺さぶられたとき、その音や音楽の価値を自分なりに見いだす。この音や音楽の価値を友達と共有することで、友達の音や音楽に対する思いや価値を受け止めることにつながる。そして、音や音楽の自分にとっての価値を広げたり更新したりする中で、新たな価値を見いだすことができる。このとき、音や音楽と関わる中で生まれる友達の思いに寄り添ったり、友達の価値付けた音や音楽のよさや美しさに共感したりする豊かな心が育っていき、共によりよく生きていくことができる社会を創造していくことができる。(図1)



<図1 音楽科における共によりよい生活を創造する子どものイメージ>

本校音楽科では、この本質的な意義を基に、音楽科における真正な学びを「感性を働かせて、音や音楽から感じ取った曲想と聴き取った音楽の構造とを結び付け、自分のイメージや感情・経験と関連付けながら、音楽の価値を広げたり更新したりする学び」とした。

本校音楽科の問題解決的な学習において、子どもたちは音や音楽と出会い、鑑賞や試しの表現を行い、音楽の構造を聴き取ったり曲想を感じ取ったりする。そして、聴き取ったことと感じ取ったことを基に、このように表現したいという思いをもち、思いを音楽で表現するための課題をつかむ。その後、思いをイメージや感情、経験などと関連付けながら広げ、その思いを表現するための意図をもち、音楽表現の工夫を試すことを繰り返しながら、課題を解決していく。課題の解決後、学んだことを生かして、さらに鑑賞をし、聴き方を深めることもある。

このような学びの中で、繰り返し「感性を働かせて、音や音楽から感じ取った曲想と聴き取った音楽の構造とを結び付け、自分のイメージや感情・経験と関連付けながら、音楽の価値を広げたり更新したりする学び」が実現され、音楽科を学ぶ本質的な意義に迫ることができると考えた。

子どもたちは、音や音楽と関わる中で、音楽をもっと味わいたいという思いや、思いを音や音楽で表現したいという意図をもつ。そして、これらの思いや意図を基に、音楽表現を高めたり聴き方を深めたりすることで、音や音楽のよさや美しさ、面白さなどに気付いていく。この経験を積み重ねていくことが、子どもたちの感性を豊かにしていく。

これらのことから、音楽科における真正な学び「感性を働かせて、音や音楽から感じ取った曲想と聴き取った音楽の構造とを結び付け、自分のイメージや感情・経験と関連付けながら、音楽の価値を

広げたり更新したりする学び」を通して、「共によりよい生活を創造する子ども」を育成することにした。

2 研究の方向

昨年度、本校では、問題解決的な学習において、真正な学びのデザインを行ってきた。実践を行う中で、味わって聴いたり思いや意図を実現しようとしたりする意欲はもてるが、聴き方や音楽表現の工夫をある程度考えたところで、音や音楽を用いて繰り返し確かめたり比較したりしようとしないうちの姿が見られた。このような子どもたちは、「音や音楽の自分にとっての価値を、広げたり更新したりすること」に迫ることが難しかった。このような課題となる姿の要因を、以下のように分析した。

課題となる姿	その姿の要因
聴き方や音楽表現の工夫をある程度考えたところで、音や音楽を用いて繰り返し確かめたり比較したりしようとしないうちの姿。	・ 表したい音楽表現の思いや意図が曖昧になってしまうため、追求している音楽の実現度が分からなくなってしまう。また、曲想と音楽の構造との関係が曖昧になっているため、追求している音楽の聴き方の深まりが分からなくなってしまう。
	・ 音楽表現の工夫や聴き方を、音や音楽で確かめたり比較したりすることのよさや面白さを実感できておらず、繰り返し、音や音楽の表現を試したり、聴いたりしようとする思いがもてない。

そこで、本年次は「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指し、真正な学びの中で、「目標への情熱」や「粘り強さ」を発揮する姿がさらに現れるように、研究を進めていくこととした。

3 研究内容

(1) 「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮された姿の具体

音楽科で目標とするのは、「思いや意図を実現すること」または、「鑑賞曲を味わうこと」である。思いや意図が実現するとは、【追求する】過程や【まとめる・生かす】過程で、思いと意図とが結びついて表現に表れることである。また、曲を味わうとは、音楽によって喚起された自己のイメージや感情を、曲想と音楽の構造との関わりなどに関連させて捉え直し、自分にとっての音楽のよさや面白さなどを見だし、曲全体を聴き深めていることである。その「目標への情熱」が発揮された姿と、「粘り強さ」が発揮された姿の具体は以下のとおりである。

○表現領域

目標への情熱が発揮された姿

思いや意図の実現に向けて、思いや音楽表現の工夫について考えたことを、自分で表現してみる姿。また、自分から音楽表現や言葉で友達に伝えている姿。

粘り強さが発揮された姿

思いや意図を表現するための技能が不足していたり、工夫が思い浮かばなくなったりしたときに現れる、以下のような姿。

- ・ 音楽表現を何度も試す姿
- ・ 友達の表現の真似をする姿
- ・ 楽譜や歌詞を注視した後に、自分で表現を試したり、表現の工夫を友達に伝えたりしている姿
- ・ 友達の工夫についての考えを聞く姿

○鑑賞領域

目標への情熱が発揮された姿

音楽を味わうことができるように、曲を聴きながら現れる以下のような姿。

- ・曲に合わせて、自分から体を動かしている姿
- ・曲を没頭して聴いている姿
- ・曲のイメージと音楽の構造との結び付きについて、楽譜やプリント等を書きながら聴いている姿

粘り強さが発揮された姿

曲の新たなよさや面白さを感じ取ったり聴き取ったりできなくなったときに、友達に聴き方を聞いたり、繰り返し曲を聴いたりしている姿。

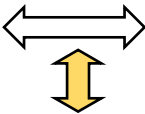
表現領域の目標は題材の、鑑賞領域の目標は単位時間の目標となることが多い。しかし、それぞれが単独の目標となるのではなく、よりどころとなる音楽を形づくっている要素を要として、関わり合う目標となる。鑑賞領域が題材の【であう】過程に設定される場合には、音楽の構造を聴き取り、それが曲想とどのように結び付いているかを考えながら、聴き深めていく。そして、鑑賞で聴き取った曲想と音楽の構造を基に、表現領域で思いや意図を設定していく。鑑賞領域が【追求する】過程や【まとめる・生かす】過程に設定されるときは、思いや意図の実現を追求する中でよりどころとしてきた音楽を形づくっている要素を生かして、鑑賞を聴き深める。

以上のような、「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮する姿を促すことができるように、以下のような学びのデザインの工夫を行う。

（２）学びのプロセス

音楽科の表現領域の学習の中で、表現の実現度が分からなくなった子どもが、「目標への情熱」や「粘り強さ」を発揮するためには、思いと意図とを結び続けることが大切である。表現を繰り返す中で、表したい音楽表現の思いや意図が曖昧になってしまい、自分たちの音楽表現の実現度が分からなくなってしまうことがある。曲想から自分の感情や経験などと結び付けた具体的な思いをもち、その思いを表現するための意図を、膨らませたり更新したりしながら、結び続けることが、自分たちの思いや意図を実現することに向けて、粘り強く表現を試し続ける姿につながる。

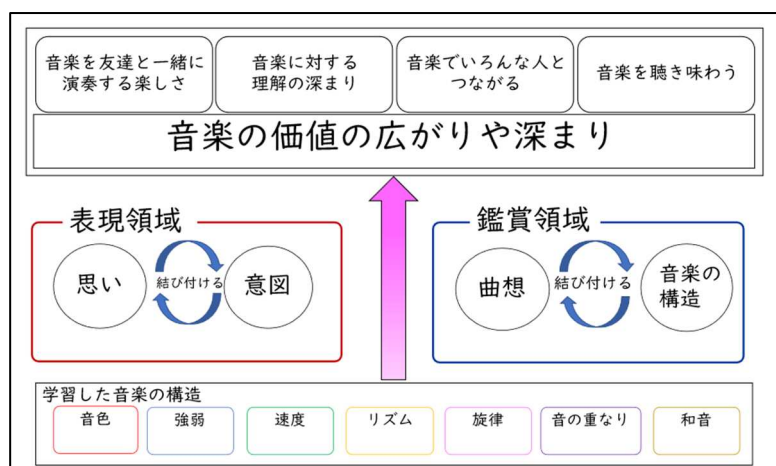
また、鑑賞領域の学習の中で、音楽の聴き方の深まりが実感できない子どもが、「目標への情熱」や「粘り強さ」を発揮するためには、感じ取った曲想と聴き取った音楽の構造とを結び続けることが大切である。曲想を感じ取ったり、音楽の構造を自分なりに聴き取ったりできても、その関係が曖昧になってしまうことで、曲を味わうまで深く聴くことができなくなってしまう。そこで、曲想の表れる理由を音楽の構造に結び付けたり、音楽の構造から生まれる曲想を結び付けたりすることで、曲のよさや面白さに気付き、深く味わうことへとつながっていく。このように、自分の思いと意図、曲想と構造を繰り返し結び付けていくことが、自分たちの思いや意図を実現したいという情熱や、音楽を味わいたいという情熱につながる。そして、粘り強く音や音楽と関わり続ける中で、自分のイメージや感情・経験と関連付けながら、音楽の価値を広げたり更新したりする、真正な学びへとつながっていくのである。

過程	学びのプロセス	学びのデザイン
であう	この音楽を聴くと□□のイメージが浮かぶよ。このイメージを表現するためには、前の題材で学習した音楽を形づくっている要素を工夫するとよさそうだな。 □□というイメージをリコーダーで表現したいな（思い）。どの音楽を形づくっている要素が関係しているのかな。 ※下線部は題材によって変更される。 曲のイメージに合う音楽を表現するために、音楽を形づくっている要素（例：音色）の工夫を考えながらリコーダーを演奏しよう。	・ 広げたり更新したりした音楽の価値の活用
追求する	□□のイメージを表現するためには、<u>音色</u>を工夫して（意図）演奏してみよう。 □□というイメージを表すために、<u>音色</u>をどのように変えるとよいかな。  考えた音楽表現の工夫を比較しながら、試してみよう。 工夫してみた音楽表現で、まだイメージは表現できていないな。／イメージを表現できるようになってきたな。 ——— 思いや意図の実現を実感 音楽表現を工夫したら、□□というイメージが表現できたよ。	・ 思いや意図の結び付きや、曲想と構造を結び付けた聴き方を評価・判断する機会の設定
まとめる・生かす	□□のイメージを表すために、<u>音色</u>の工夫を考えたよ。音楽表現を工夫して<u>音色</u>が変わると、自分たちの表したいイメージが表現できるようになったよ。 この鑑賞曲から△□というイメージが浮かぶのは、楽器の音色が関係ありそうだね。	・ 広げたり更新したりした音楽の価値の蓄積 ・ 曲想と構造を結び付けた聴き方を評価・判断する機会の設定

（３）真正な学びのデザイン

①音楽科の本質に迫る学び

音楽科の本質に迫る学びとして、音楽科を通して広がった音や音楽の価値を子どもと共有する。（図２）価値とは、子どもたちが表現したり鑑賞したりする中で、自分のイメージや経験等と結び付けながら、実感を伴って感じ取ったり聴き取ったりした、音や音楽の知識やよさ、面白さ等である。学年の初めに、前年度の表現・鑑賞を通して広がった価値を確認する。また、題材の終末ごとに、題材で新たに見いだした価値を記したり、題材相互の関わりを考えたりする時間を設定する。そして、この価値を新たな題材を学習する際に見返しながら、思いや意図へとつなげていく。



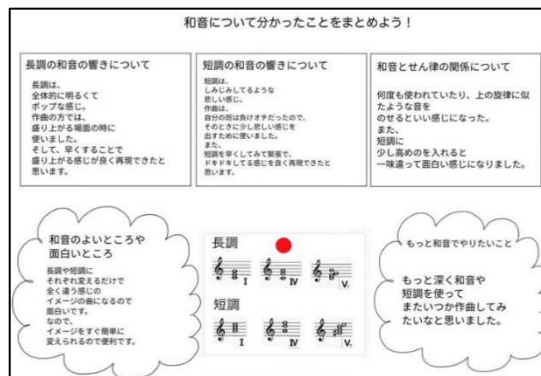
<図２ 音楽を学ぶよさ>

②当事者意識のある学び

広げたり更新したりした音楽の価値の蓄積と活用

音楽科の問題解決的な学習において、「目標への情熱」や「粘り強さ」を発揮した子どもの姿が現れるために、題材を通して見いだした、音や音楽に対する自分にとっての価値を言語化し、蓄積していく。価値の蓄積と活用が、新たな思いや意図を実現したい、音楽を味わいたいという情熱や、音楽との粘り強さを発揮した関わり方につながっていく。そこで、題材の【まとめる・生かす】過程で価値を蓄積し、【であう】過程で活用していく。

題材のまとめの際に、題材を通して見いだした価値を振り返る。（図3）「表現の高まりと工夫した音楽表現の結び付き」「音や音楽と関わることでできるようになったこと」などを観点に、音や音楽との関わりの中で見いだした自分なりの価値を振り返る。鑑賞や初めて追求する音楽の構造を扱う題材では、「見付けたよさや面白さ」を観点にすることもある。この価値を題材の最後に共有することで、音楽の価値を広げたり更新したりできる。また、振り返りの際にこれからやってみたいことや生かしたいことを考え、次の題材の最初に共有することで、新たな思いや意図へとつながっていく。



＜図3 題材の振り返りシート＞

思いや意図の結び付きを評価・判断する機会の設定

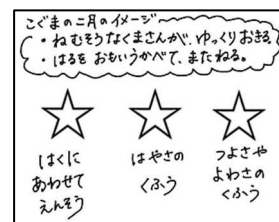
音楽科の表現領域において、「目標への情熱」や「粘り強さ」を発揮した子どもの姿が現れるためには、思いや意図の結び付きを自分で評価・判断したり、他者に評価・判断してもらったりすることが大切である。なぜなら、評価・判断をすることで、自分の思いと意図が結び付き、それらがどの程度実現できているかが分かるからである。実現度が達成されていないときには、思いや意図を更新したり、新たな音楽表現の工夫を生み出したりしていくことにつながる。達成されているときには、価値の更新や音楽表現の高まりにつながる。

同じ評価・判断の基準で追求できるように、思いや意図について共有しておくことが大切である。そのために、表したい思いやイメージを基に、段階的な目標を子どもとともに考える。（図4）

【追求する】過程で評価・判断を行う方法は以下のとおりである。

自分で聴き、評価・判断する	工夫を試している音楽表現やそのときの様子、完成した音楽作品を、動画や音声で記録する。 →観点を基に、自分で聴いて実現度を評価・判断する。評価を生かして、表現の工夫を考える。
他者が評価・判断する	全体追求の際、1人、または数人が代表として表現を聴く。 グループ追求の際、代表1人、またはグループ同士で表現を聴き合う。 →観点を基に音楽を聴いて評価・判断した実現度や、実現度を上げるためのアドバイスを伝える。代表として聴く子どもは固定するのではなく、順番に、多くの子どもが担当できるようにする。

また、【まとめる・生かす】過程で、思いや意図が、音楽表現の工夫に結び付き表現できていたかを、評価・判断して、振り返りを行う。



＜図4 段階的な目標＞

(具体例) 題材：5年「曲想の変化を感じ取ろう」 教材：「キリマンジャロ」
 ねらい：グループで作ったキリマンジャロのストーリーを、曲想の変化を通して伝えるために、
 よりよい音楽表現の工夫を考える。
 グループの作ったストーリー：ワクワクしながら山登りを始めた人が、途中で足が動かないほど
 ヘトヘトになりながらも、最後は山頂に到着し達成感を味わう。
 評価・判断する観点：途中で足が動かないほどヘトヘトになりながら登っていく様子を、ゆっく
 り重そうに演奏するという音楽表現の工夫をしたことで、表すことができ
 たか。

①重そうにゆっくり演奏
 すると、ヘトヘトな感じ
 になるのではないかな。
 重そうにゆっくり弾いて
 みるね。



②(聴き役)今の合奏では、ゆ
 っくりだけど、1つ1つの音が
 切れて聞こえるから、疲れた感
 じが伝わりづらいね。

③たしかに。私は鍵盤ハーモニ
 カで、息を長めに入れて、伸ば
 して演奏してみようかな。

4 授業実践 6年「思いを表現に生かそう」

(1) 題材の学びのデザイン

合唱曲や合奏曲を、自分のイメージや感情、経験と結び付けながら捉え、音色や強弱を生かして工
 夫して表現する力を育むために、次のように題材を構想し、学びのデザインを工夫した。

目標	曲に込めた思いが伝わるように、イメージに合う音色や強弱を工夫して、合唱や合奏をする。	
過程	時間	
であう	事前	○合唱、及び合奏の候補曲を聴き、感謝の集会で発表したい曲を決める。
	1	○合唱曲『あさがお』と合奏曲『RPG』を聴き、表現に対する思いをもつ。
	1	○『あさがお』の各旋律を歌ったり、RPGを聴いたりし、学習のめあて『思いを込めた表現ができるように、表現の工夫を考えながら合唱や合奏をしよう』を立てる。
追求する	1	○『あさがお』の中で、一番心を込めたいところを考えながら、合唱する。
	1	○『あさがお』の歌詞の想像を広げながら、合唱する。
	1	○『RPG』のストーリーを想像したり、パートごとに演奏したりする。
	1	○『RPG』の中で、一番心を込めたいところを考えながら、合奏する。
	2	○『RPG』を、自分たちの思いを表現するための工夫を考えながら、合奏する。
まとめる 生かす	行事	○『あさがお』と『RPG』を感謝の集会で発表する。
	1	○『あさがお』と『RPG』の学習を通してできるようになったことを振り返る。

※技能の習熟には、担任の時間、休み時間や朝の活動の時間も活用する。

本題材において、「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮された姿の具体は、以下のとおりである。

(目標への情熱)『あさがお』『RPG』の曲に対する思いや意図の実現に向け、思いや音楽表現の
 工夫について考えて自分で表現をしている。また、自分から音楽表現や言葉で伝えている姿。

(粘り強さ)自分の思いや意図を表現するための技能が不足していたり、表現の工夫が思い浮か
 ばなくなったりしたときに現れる、以下のような姿。

- ・歌や演奏を何度も試す姿。 ・友達の歌い方や奏法を真似する姿。
- ・歌詞や楽譜を注視した後に、自分で表現を試したり、表現の工夫を友達に伝えたりしている姿。
- ・友達が考えた歌い方や奏法の工夫についての考えを聞く姿。

なお、本題材において、子どもが「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮できるように学びのプロ
 セスを想定し、学びのデザインを次のように具体化して行った。『RPG』を中心に記述していく。

	プロセス（『あさがお』は省略）	学びのデザインの工夫の具体
であう	RPG はみんなで冒険しているイメージが浮かぶよ。主役は 6 年 2 組かな。にぎやかな音色が元気なクラスのイメージに合うよね。 「風をきって」の題材でやった、吹雪の中進む辛い感じのときには暗い音色で強く、希望が見えたときには明るい音色で優しく演奏したように、曲想の変化に合わせて音色や強弱を変えたらいいかな。 仲間が集まって、一緒ににぎやかに冒険している様子を合奏で表現したいな。だんだん仲良く集まる感じを出したいから、2 回目のサビを特に盛り上げたいよね。 曲のイメージを表現できるように、音色や強弱の工夫を考えながら合奏しよう。	・前題材で広げたり更新したりした音楽の価値の活用
追求する	仲間がだんだん集まって、前向きに進んでいく様子を表すために、サビのところを盛り上げたいね。サビの強弱や音色の工夫を考えながら演奏してみよう。 前向きな感じを表すためには、元気で明るい音色で演奏できるといいな。 ↔ サビの部分の息の入れ方を、短くはねるようにしてみたらどうかな。 ↑ サビを元気で明るい音色にしたら、にぎやかに冒険している様子は出せていたよ。でも、だんだん集まる感じが、まだ出せていないと思うな。強弱を工夫してみるといいのではないかな。 ↓ 思いや意図の実現を実感 最初の鍵盤の音を小さくして、だんだん他の楽器と一緒に強くしていったら集まる感じが出せたよ。サビもより強調されて、イメージに合う演奏になったな。	・思いや意図の結び付きを評価・判断する機会の設定
まとめる・生かす	サビに向かってクレッシェンドしていくことで、仲間がだんだん集まっていく様子を表せたな。ただ、クレッシェンドするのではなく、前向きに進んでいく様子を表すために、明るい音色で演奏するのが大切だったな。みんなで支え合う様子も、旋律を強く周りの音を支えるような音色で演奏したら表せたよ。自分たちの考えたストーリーを演奏で表現できて嬉しいな。	・本題材で広げたり更新したりした音楽の価値の蓄積（振り返りシート）

（2）学びの実際※Gは抽出児童，Cはその他の子ども，Tは教師，〰は目標への情熱を，〰は粘り強さを発揮した子どもの姿

【本題材における，子どもたちや抽出児Gの学び】

①【であう】の過程（事前～第2時）

感謝の集会という，6年間の感謝を保護者に伝える集会に向けて，演奏する合唱曲と合奏曲の候補曲を教師が選び，事前に聴かせた。子どもたちは，歌詞や曲想が，自分の気持ちや成長に合うものという観点で曲を選び，本学級の児童は合唱曲『あさがお』と合奏曲『RPG』を選択した。

第1時，子どもたちは学級で選択した曲を改めて聴いたり，試しの歌唱をしたりしながら，感謝の集会で音楽表現を通して伝えたいことや，曲に込めたい思いを考えた。教師は，前題材の歌唱や合奏を通してできるようになったことの振り返りを見返す時間をとった。子どもたちは，それを基に，『あさがお』や『RPG』に対する思いをもった。Gは，前題材のプリントを見返した後に「歌詞や曲想に合う強弱を付けて，情景を想像しながら合唱や合奏をしたい」という思いをもった。

第2時，『あさがお』の各旋律を歌い，試しに合唱をしたり『RPG』の楽譜を見ながら聴いたりして，それぞれの曲のイメージを想像し，そのイメージを表現したいという思いをもった。そして，「思いを込めた演奏ができるように，表現の工



＜図5 RPGの演奏の目標＞

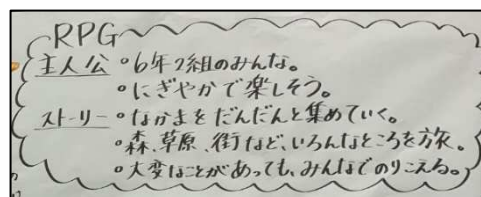
夫を考えながら合唱や合奏をしよう」という学習のめあてを立てた。さらに、曲に対する思いを表すための目標を子どもたちと考えた。RPGでは、図5のように5段階で設定をした。

②【追求する】の過程（第3時～第8時）

第3時では、『あさがお』の各旋律を歌い、技能の習熟を図った。そして、歌いながら、それぞれの楽譜の、聴く人の心を動かしたいところに♡を記した。Gは、「つまずいても転んでも 涙を拭いて目を開ければ 進む道も広がる空も 笑っているはずさ」に♡を書いていた。

第4時では、『あさがお』のイメージを膨らませながら、自分たちの思いと表現の工夫を考えていった。Gは「つまずいても～」のところを、前に進んでいく感じが出るように歌いたいという思いや、そのために強弱を工夫するとよいという意図をもち、友達に伝えていた。また、このやりとりのあと、どこから強くするか歌いながら友達と相談する姿も見られた。

第5時では、『RPG』を聴いたり演奏したりしながら、曲のイメージを広げていった。子どもたちは、6年間成長してきたことや、6年2組のにぎやかな様子を曲想と結び付けながら、図6のような主人公のイメージとストーリーをこの曲から想像した。



＜図6 RPGから想像したイメージ＞

第6時では、自分たちの学級の様子と関連付けて考えた曲のストーリーを表すために、どのような表現の工夫ができるか、曲を聴いたり表現を試したりしながら考えた。ストーリーを表現するための音楽表現について話し合ったGの様子は以下のとおりである。

G：2組が成長してきた感じを表したいから、だんだん集まっていく様子を表現したいよね。

C：サビのところが元気に演奏できるといいよね。

G：2組の友達が集まって、みんなで楽しむ様子とかね。

C：サビを元気に演奏するとよいかね。

C：にぎやかな音色で演奏する。

G：だんだん強くしていくといいのではないかな。

自分たちの学級の様子と関連付けて考えたストーリーを表現するために、具体的な様子を想像し、だんだん強くしていくという音楽表現の工夫を考えて自ら伝えている姿は、目標への情熱を発揮した姿だと言える。この後、子どもたちは、卒業前の今、仲間として成長した自分たちの様子が伝わるように、2回目のサビに一番心を込めたい、その部分を盛り上げたいという具体的な思いと、そのための工夫を考えていた。そして、考えた音楽表現の工夫を試しながら実際に演奏をしてみた。

実際に演奏をし、振り返りをしたGは、だんだんと強くしていきたいという思いはあるものの、まだ自身の表現に結び付けられてはおらず、まずは技能を高めたいと振り返っていた。（図7）



＜図7 Gの振り返り＞

第7時では、それぞれのパートでサビに向けてだんだん人が集まってくる感じが表れるようにする方法を、合奏をしながら考えた。木琴パートが、マレットをプラスチックと毛系のどちらがよいか演奏を通して考えたり、太鼓パートが、太鼓の大きさやクレッシェンドの方法を他パートと合奏しながら考えたりと、イメージが表現できるように試しながら工夫を考えた。Gは、「全体で演奏するとき木琴の音色を意識しながら合奏ができた。木琴のマレットを変えることで、音色が変わって曲の感じも変わることがすごいと思った。自身の鍵盤ハーモニカで息の入れ方や、演奏の仕方を工夫したい。」と振り返っていた。

第8時で、自分のパートの演奏の工夫にだけ視点が向いている子どもが多いと感じた教師は、全体

の演奏を評価・判断し、考えられるように、図8のワークシートを用意した。そして、自分と全体の視点から「今できていること」、「もっとできるといいこと」を、違う楽器の友達と少人数で考える時間を設定した。そして、子どもたちがパートごとに役割意識をもってから再び全体合奏を行った。その際、代表の子が聴き（図9）、「みんなでサビを強くしたことで元気な感じは出ているが、集まっていく感じがもう少し出せるとよい」という評価をみんなに伝えた。その評価を受けて、集まっていく感じを表すための表現の工夫を考えるGの様子は以下のとおりである。

＜図8 Gが考えた表すために
できるということ＞

＜図 9 聴いて評価・判断
したことを伝える様子＞

新たな音楽表現の工夫が思い浮かばなくなったときに、楽譜から考えようと注視し、その後に考えた工夫を伝えたり、自分の考えを基に繰り返し演奏を試したりするGの姿は粘り強さを発揮した姿といえる。子どもたちは、代表の子の評価や判断をきっかけにして、思いや意図を更新していくことができていた。この時間の最後の振り返りで、Gは前時の振り返りに記した、表現につながられていない(☆3)という評価から、サビのところを工夫して表現できた(☆4)という評価に上がっており、思いや意図の実現を実感できていたことが分かる。

<図 10 Gの振り返り>

子どもたちは、学校行事「感謝の集会」で、保護者へ向けて合唱と合奏の発表を行った。そして、第8時に、題材の振り返りを行った。右記(図10)はGの振り返りシートである。仲間が集まってくるイメージと、サビのところで強弱を工夫することを結び付けて記述していた。

また、題材を通して、子どもたちは、思いや意図を実現することに向けて、音色や強弱の工夫を考え、自分から友達に伝える「目標への情熱」を発揮した姿が見られた。また、思いや意図を表現するための技能が不足した際の、音楽表現を何度も試したりする姿や、音楽表現が浮かばなくなったときに楽譜を注視して音楽表現の工夫を考えて伝えたりする姿といった、「粘り強さ」を発揮する姿も見ら

れた。これらの姿が見られた要因は、【であう】過程で、表したい音楽表現とその理由について伝え合い、思いをしっかりと持ったことと、題材を通して、思いとその思いを表すための意図を結び続けられるようにしたプロセスが有効であったと考える。【追求する】過程の中で、音楽表現の工夫を考える際に、前題材で曲のイメージの変化に合わせて音色や強弱を変えたことを思い出して、曲の場面ごとに音色や強弱を考えて伝えている姿があった。これは、【であう】の過程で今までの学習と本題材をつなげて考えられる子どもが多くいたためであると考え。また、何度も試すことができた要因の1つとして、題材を通して、自分たちの合奏が表したい音楽にどれだけ近付いているか、聴いて評価・判断する機会を設定したことも有効であったと考える。子どもたちの言葉で、イメージに合わせて音色や強弱の工夫が結び付いているか伝え合うことで、さらなる音楽表現の工夫を考えたいという思いにつながるだけでなく、自分たちの成長も実感することができていた。

5 成果と課題

本校音楽科における問題解決的な学習の中で、共によりよい生活を創造する子どもの育成に向けて、「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮する姿が現れるための学びのプロセスと、そのプロセスが生み出す学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

○成果

音や音楽に出会った際、表現領域では、音や音楽から想像する具体的なイメージや感情を基に思いをもち、思いを表現するための工夫と結び付けて表したい音楽表現を考える姿が見られた。そして、音楽表現を追求する際に、考えたことを友達に言葉や音楽表現を使って伝えている姿も見られた。また、鑑賞領域では、音楽に没頭して聴き、曲想と構造の結び付きについて気付いたことを楽譜やプリントに記述している姿も見られた。これらの姿は、目標への情熱を発揮した姿と言える。この姿が表れたのは、思いや意図を結び続けるプロセスを想定し、その中で、題材ごとに広げたり更新したりした価値を蓄積し、それらを新たに学習する題材でも活用したデザインが有効であったためだと考える。

音楽表現を追求する際に、自分たちの表したい音楽表現を実現するために何度も繰り返し表現したり、歌詞や楽譜から工夫の手がかりを見いだそうと注視したりする姿が見られた。また、聴き方を追求する際に、友達の聴き方を知り、繰り返し聴く姿が見られた。これらは粘り強さを発揮した姿といえる。要因としては、自分たちが表したい音楽表現の実現度を聴き合って評価・判断したことが有効であったからだと考え。

○課題

【まとめる・生かす】過程での振り返りで、できるようになったことや分かったことが書けても、学んできた音楽の、自分なりの価値まで振り返ることのできない子もいた。音楽表現の楽しさやよさを実感したり、鑑賞曲を味わって聴けるようになった自分の成長を実感したりと、題材を終えた後に、学んできた音楽の価値を見だし、蓄積していけるような振り返りの仕方について考えていく必要がある。

【参考文献】

- ・山本文茂【著】『音楽はなぜ学校に必要かその人間的・教育的価値を考える』、音楽之友社、2018年
- ・日本音楽教育学会『音楽教育研究ハンドブック』、音楽之友社、2019年、p26-39、170-193